Taking A Chance On Love
恋のチャンス
Simone
シモーネ

1. ドント・レット・ミー・ビー・ロンリー・トゥナイト
Don't Let Me Be Lonely Tonight《J. Taylor》(5：02)

2. 我が恋はここに
Our Love Is Here To Stay《G. Gershwin, I. Gershwin》(4：42)

3. 君を想いて
The Very Thought Of You《R. Noble》(5：26)

4. フォトグラフィア
Fotografia《A. C. Jobim》(5：34)

5. リトル・ボーイ
Little Boy《F.Henry - M.Hyde》(2：57)

6. 遥かなる影
Close To You《H. David , B. Bacharach》(5：02)

7. 恋のチャンス
Taking A Chance On Love《John Latpuche, Ted Fetter, Vernon Duke》(2：59)

8. アイ・ウィッシュ・ユー・ラブ
I Wish You Love《A. Beach, C. Trenet》(3：50)

9. 想いあふれて
No More Blues《J. Hendricks, J. Cavanaugh, A. C. Jobim》(4：11)

10. ブレイム・イット・オン・マイ・ユース
Blame it On My Youth《E. Heyman, O. Levant》(5：30)

シモーネ Simone《vocal》
ジョン・ディ・マルティーノ John Di Martino《piano》
ジョージ・ムラツ George Mraz《bass》
ティム・ホーナー Tim Horner《drums》
ヒューストン・パーソン Houston Person《tenor Sax》
デック・オーツ Dick Oatts《alto flute, alto sax, soplano sax》

録音:2006年11月23&24日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

℗© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in November 23 & 24, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover : Mary Jane
Designed by Taz

音楽の国オーストリアのジャズ・シンガー、シモーネの待望のサード・アルバム『恋のチャンス』の登場である。レコーディングのメンバーは、前作『ロマンス』とほぼ同じ。ピアノ・トリオは、ピアノのジョン・ディ・マルティーノ、ベースのジョージ・ムラーツ、ドラムのティム・ホーナーという面々。ピアノとドラムはヴィーナスレコードのロマンティック・ジャズ・トリオというグループのメンバーでもある。このトリオにテナー・サックスのヒューストン・パーソン、アルト・サックス&フルートのディック・オーツがゲスト参加した。前作はピアノ・トリオが同じで、サックスはエリック・アレキサンダーだった。

このアルバム『恋のチャンス』は前作から約２年半年ぶりの作品となる。３枚ともヴィーナスレコードの制作でニューヨーク録音。ファースト・アルバム『ムーンライト・セレナーデ』／2003年７月録音／2004年２月発売。セカンド・アルバム『ロマンス』／2004年４月録音／同年11月発売。そして、今回のサード・アルバムが2006年11月の録音だ。シモーネは現在、20代の半ば。大きく変わるものではないだろうが、吸収と反映の早い時期であり、この数年でシモーネは歌手としてひと回り大きくなったようだ。歌唱に安定感と表現力、そして惹き寄せる魅力が増している。とくにスロー・ナンバーが素晴らしい。彼女の歌のスタイルはデビュー作の頃から不動である。シモーネのスタイルは、もちろんいい意味で極めてオーソドックスなもの。原曲のよさを引き出す正統派の歌手としての基本的な姿勢を大切にするタイプである。大きくフェイクしたり、無理にアドリブを加えたりしない。誠実な人柄の伝わる、まったくケレン味のないジャズ・ボーカルを聴かせる。ジャズ・ボーカルとひと口にいっても実にさまざまなタイプが存在するが、シモーネのような歌手も僕は好きである。彼女のボーカルは親しみやすくてナチュラルで品があり、安心感やくつろぎを与えてくれる。また、ヨーロピアン感覚といってもいいと思うのだが、欧州らしい透明な清涼感もある。実はたくさんいるようであまりいないタイプのジャズ・シンガーなのだ。シモーネを“妖精”と表現した文章を見かけるが、彼女に似合う言葉だと思う。こういう得がたい魅力をいつまでも持ち続けてほしいものだ。

シモーネと参加メンバーのプロフィールを整理しておこう。シモーネは1981年生まれ。グラーツ近郊の音楽一家出身で、両親は共に音楽教師。父はトランペット、母はフルートを演奏する。シモーネは8歳からクラシック・ピアノを始め、父のバンドで歌い始めた。15歳で歌手としてプロ活動を開始。グラーツの音大を卒業した。アメリカでしばらく活動後、母国を中心にして世界的な活躍をしている。ジャズの他では、好きな歌手としてスティービー・ワンダー、アレサ・フランクリン、プリンス、エバ・キャシディの名前を上げている。

ピアノのジョン・ディ・マルティーノはフィラデルフィア出身の実力派。十代の頃、地元フィラデルフィアでは大半のジャズ・クラブで彼の姿を見ることができたという。ニューヨークを拠点としてストレートアヘッド・ジャズとラテン・ジャズの両方で活躍中だ。このシモーネのアルバムでマルティーノは伴奏者、ソロイストの両面で素晴らしい演奏を聴かせている。もっと注目を浴びてほしいピアニストである。ベースのジョージ・ムラーツはジャズ・ファンなら知らない人はいないベテランの名人。チェコ共和国ピセフ出身で、1970年代の初めからニューヨークの第一線で活躍している。ティム・ホーナーはバージニア州ロアノーク出身。両親共にミュージシャンで、1980年にニューヨークに進出。テナー・サックス奏者のヒューストン・パーソンは、ソウル・ジャズ／メインストリーム・ジャズ界の大御所。歌伴ではエッタ・ジョーンズの録音が多い。アルト・サックス／フルートのディック・オーツは、名門“ビレッジ・バンガード”を拠点にするバンガード・ジャズ・オーケストラの音楽監督でもある。アイオワ州出身で、1977年にニューヨークへ進出。サド・ジョーンズ～メル・ルイス・オーケストラで名を上げた。そのサド～メル・オーケストラを前身とするのがバンガード・ジャズ・オーケストラだ。

シモーネはこのようなアメリカ・ジャズ界のエキスパートたちを迎え、彼女の魅力と実力を発揮している。共演者は歌伴奏のみならず、彼らの演奏もフィーチャーされる場面も多くあり、コラボレーションといえる展開でもある。ジェイムス・テイラーのヒット曲から始まる収録曲は、スタンダード・ソングを中心にして、ボサノバやカーペンターズの曲も入れるなど、彼女のボーカルにしっくりくる名曲揃いである。歌詞のひとつ一つやメロディーに思いをこめて、原曲のよさを引き出すシモーネのボーカルは、歌を歌うという行為の根源的なよろこびを伝えてくれる。

1. ドント・レット・ミー・ビー・ロンリー・トゥナイト

シモーネの心のこもった歌唱に惹き付けられるこの歌は、ジェイムス・テイラーが1973年にヒットさせた彼のオリジナル。テイラーのオリジナルで共演したマイケル・ブレッカーは、のちに自分のアルバムにテイラーをゲストで迎えてこの曲を録音した。他にもデビッド・サンボーン、ダイアン・シューア、ジョン・ピザレリらが取りあげている。

2. わが恋はここに

“私たちの恋は永遠。ロッキー山脈が崩れても、ジブラルタル海峡がひっくり返っても…”というアイラ・ガーシュインによる歌詞がユーモラスなラブ・ソング。作曲はジョージ・ガーシュイン。ここでの伴奏はピアノ・トリオのみ。ジョン・ディ・マルティーノのピアノ、ジョージ・ムラーツのベースが素晴らしい。

3. 君を想いて

シモーネがバースから歌い上げるこの曲は、愛する人への思いを切々と歌う美しいバラード。イギリスで生まれた曲で、アメリカでもスタンダード・ソングになった。バンド・リーダーのレイ・ノーブルの作詞作曲。得意レパートリーにしたナット・キング・コールのバージョンが有名だ。

4. フォトグラフィア

アントニオ・カルロス・ジョビン作曲のボサノバ・ナンバー。ジョビンの数ある有名曲と比べるとあまり知られていないが、日本のシンガーなどが取りあげているのをたまに見かける美しい歌曲だ。ここではディック・オーツがフルートで加わる。ボサノバにはフルートがよく合っている。

5. リトル・ボーイ

原題は「リトル・ガール」、1931年にフランシス・ヘンリー、マデリン・ハイドが共作した。ナット・キング・コールなどがヒットさせた。シモーネのバージョンは、女性の立場から歌ったもので、「ガール」を「ボーイ」に換えている。こういう言い換えはジャズではよくある。ダイアナ・クラールがレイ・ブラウンのアルバムでやはり「リトル・ボーイ」として歌っていた。

6. 遥かなる影

バート・バカラック・ナンバー。1970年にカーペンターズの歌がナンバーワン・ヒットを記録した。バカラックの作曲、ハル・デビッドの作詞。メロディーも歌詞もカーペンターズやシモーネにぴったりの優しさで包まれる曲だ。

7. 恋のチャンス

ミュージカル『キャビン・イン・ザ・スカイ』(1940年)のためにバーノン・デュークが作曲、ジョン・ラトゥーシュとテッド・フェッターが作詞。恋のチャンス到来に腕まくりするような明るいナンバー。シモーネはスキャットを交えながらスインギーに乗った歌唱を聴かせる。

8. アイ・ウィッシュ・ユー・ラブ

一転、ピアノのみの伴奏でスロー・バラードで魅せるこの曲は、シャルル・トレネが1942年に作詞作曲したシャンソン「Que reste-t-il de nos amours」(残されし恋には)が原曲。アルバート・A・ビーチが英詞をつけて「アイ・ウィッシュ・ユー・ラブ」という曲名でアメリカでもヒットした。

9. 想いあふれて

ボサノバの名曲「想いあふれて」(Chega de saudade)の英語バージョンのタイトルは「No More Blues」。アントニオ・カルロス・ジョビンの作曲、ビニシウス・ヂ・モライスの作詞。ジョアン・ジルベルトのシングルとアルバムが1950年代末に大ヒット。それをきっかけにブラジルでボサノバ・ムーブメントが巻き起こった。英語詞はジョン・ヘンドリックスとジェシー・キャバノーによるもの。シモーネのバックはピアノ・トリオ、マルティーノのピアノがフィーチャーされる。

10. ブレイム・イット・オン・マイ・ユース

1934年にオスカー・レバントが作曲、エドワード・ヘイマンが作詞。若さゆえの後悔がにじみ出るホロ苦いナンバー。クリス・コナーやナット・キング・コールらが歌うようになってから、ジャズ・スタンダードとして知られるようになった。ラストはしっとりとピアノのみの伴奏によるスロー・バラードで締めくくられる。

(高井信成)